

愛玩 アイデンティティ



ADULT ONLY

TECHNROID unofficial fanbook
MOB×RH-0615XX/Rodhi

※18歳未満の閲覧・購入禁止

※闇マスター×ロージー／モブ×ロージー

※過去捏造、性暴力表現が含まれます

異社会で闇マスターに作り出された原の綺麗な
アンドロイドなんて要玩用以外に何の用途があるんだ！
そんな気持ちをもつけた漫画＆小説本です。
過去のロージーのため、オラつき、ガラの悪さはありません。
今のロージーが楽しくボラとキオと暮らしてるんだから
過去はいくらでも隠くていいんだ！という方向けです。

人間とアンドロイドが
共存する社会

その置かれる時代であっても
人間がアンドロイドを
尊敬するのは変わっていない

貴社会に通じる
ロボット製造者——
星マスターに送られる
通信アンドロイドは
いつも双膝同然の姿이었다



その双膝の中でも
金持ちに尊重される
アンドロイドがいる





取り除かれた空色の瞳

マ

あつたが
あつたが
あつたが
あつたが
あつたが

性交に特化した
機能を備えたボディ

産まれるために
生まれたマインドロイド

「RH-0615XX / ロージー」



愛玩
アイデンティティ



【遊玩用アンドロイド女子のSEX／ロージー仕様書】

・性感プロダム

ロージー本体の機能、各センサーやアタッチメントから送信される快感値、苦痛値をもとに、紅潮、喘ぎホイイス、絶頂後下などのイベントを行う。

喉奥、乳首などのパーツごとのイベント反転率、快感値、苦痛値によるイベント発生確率を変更できる。(「パーツごとの感度、反応を調整可能」)
イベントは有効、無効を変更可能。

・口陰

喉奥にセンサーがあり、快感値または苦痛値としてデータに変換する。

唾液が分泌されないため、フェラチオなどの利用時にはローション等を口に含ませる必要がある。えずくことはない。(苦痛値によるイベントとして設定は可能。)安全装置により嘔吐等の危害を与える行動はできない。

・性器(アタッチメント)

恥骨下から膣の門通りまでの部分は男性型、女性型問わず、類似性器を装着できる。

アタッチメントの接続により快感値、苦痛値のデータ送信が可能。

類似射精などの液体噴出は、アタッチメント内で実装されている場合は、ロージー本体とは独立した形で実装可能。

・紅門(アタッチメント)

紅門部に非貫通オナホール状のアタッチメントを装着できる。

アタッチメント接続により快感値、苦痛値のデータ送信が可能。

(肉壁に腫れのがついたオナホールを付けることで、挿入時に快感を貰わせるハニートラップの裏もあったが、まだ実用化されていない。この場合、アシドロイド自身は挿入される立場であり、アシドロイドが故意に人間を傷つけるわけではないため、安全装置は作動しない。)

・メクラット

アタッチメントを取り替えることで肉生的で性病感染リスクが非常に低く、ロージー本体が感染しないため、感染率も性交できる。

剛硬やイベントの変更により、利用者の筋肉や状況に応じて、ロージーの性感、反応を調整できる。

安全装置により、暴れる等の抵抗を行わないため、人間よりも安全性が高い。

・デメリット

ロージー本体が重い(70kg)ため、体位によっては制限がある。

ロージーのメモリにより、強制的に機能が制限される可能性がある。

【メモリ上書き等による対応を検討中】

ロージーが製造されて間もなくのこと。

ベッドの上でアンドロイドの少年がマスターを名乗る男に組み敷かれる。腰を寄せられていないアンドロイド——*空(そら)の文(ぶん)*／＼ロージーは、大きく開いた足の間で肛門アタチナメントに指を入れられていた。

センサーで内部を触られているということは理解できる。それとは別に、触られることにより絶えず「何か」のデータが送達されていく。それはインストロールが完了するまでは0と1の羅列が何の意味も成さないことと同じように、まだロージー自身にも何なのかわからない。

「あーんっ……」

腹が膨らみから響く声も、指を深く入れようと指を動かす時も、ロージー自身が認識していない挙動だった。

エラーは出ていないのに、自分の想定していない動作をするなんて——バグではないかと思うのに、目の前の男はニタリと笑って否定した。

「気持ちいいんだろう？ 不思議なことじゃないよ」

気持ちいい？人間の喜怒哀楽に近いものをプログラムが再現することは知っていたが、気持ちいいとはどんな感覚なのだろうか。気持ち、つまり心が良いということ。では、良い、とは何なのか。

ロージーはますますわからなくなってしまった。

「はあ……もう我慢できない。押れるよ……」

男はロージーの股ぐらから這い出ると、ストラップから生殖器を取り出す。赤黒く充血し、そそり立つそれは、ロージーにとって初めて見る、自分に無い物体だった。

「これが……人間の……」

「そうだよ。これから形も味も臭いも、たくさん学習させてあげるからね。まずはよく形を覚えるんだ、ココでね」

男は性急にロージーの腰を掴むと、自らの生殖器をロージーの肛門アタチナメントに差し込んだ。ぐぶっとやわらかなエラストマーとローションの隙間から音が鳴ると共に、高い声が部屋に響いた。

「ああっ！」

ただセンサーに触れた、はずだった。

指とは比べ物にならない質量が、臀部に埋め込まれたオナホルムの内側に入っただけ。ロージーは精神的にはそう理解していたが、実際は大きな声が出てしまっていた。状況を認識する前に、男は息を荒らげながら腰を揺すり始める。

「特……びっ…… あっ…… あ……」

——データが流れ込んでくる！

処理が終わらないのに、男の生殖器が内部を渡るたびにデータが送られる。上擦った声が出る理由も理解できないまま、データの洪水にロージーは翻弄される。

「はあっ、はあっ…… いい反応だ！ ここが気持ちいいのかい？」

男が生殖器を差し込む角度を変えると、また新たなセンサーが反応する。

「ああっ！ な、んでっ……？」

センサーに当たることで絶えずデータが流れてくるのだから、漏たらないうように腰を引けばいいはずだが、ロージーの身体は男の動きに合わせて腰が動いていた。

なぜ身体が男を、陰茎を求めているのか、わからない。遠いつかない処理領域の片隅でロージーは考える。

体が無意識にそうするということは、プログラムされているからだろう。

何かの条件で、プログラムされたイベントが起きる。ただそれだけのことだ。

——本編に？

「もっと欲しいんだねえ。ほら、奥まで学習しなさい！」

「んあ……ううっ……」

男はベッドと敷面になるようにロージの腰を持ち上げ、体をかけて、真上から突き刺すように生殖器を挿入させる。ギシギシとベッドが音を立て、その合間にロージの声が上がると、

「はあ……あっ……もっと……ああっ！」

欲しい、男からその言葉を言われて、ロージは納得した。

自分は欲しがっているんだ、欲しいというのは、心が——気持ちが良いから湧く、感情だ。そして自分は、人間の男の陰茎を体内に入れることを気持ちいいと感じるようにプログラムされているのだ。

そう理解してから、流れ込むデータの意味がわかった。

「……き、気持ちいいっ、もっと……」

このデータは人間の言うところの「快感」。

センサーが感覚を快感として認識していく。しかしロージには快感をどう処理すべきなのかわからない。

男の動きが早まっていき、男から出る汗がロージの体を伝う。液体の伝う感覚、よっかる肌の衝撃、陰茎に満たされる内部——センサーが拾う全てが快感に変わる。

男の呼吸音、自分から発せられる音、それすらも。

ただ重複されていく快感に、処理領域を圧迫されていく。

「あ、あっ、あ、あ——」

快感に、メモリが溢れつつおされていく。

ブツリ、手順しないエラー。アウトオブメモリー。強制シャットダウン。

そのどれでもない何か。

一瞬、ロージは自分の制御しえない何かが発生したと感じた。しかしロージは今、エラーなく稼働している。どこにも異常はない。その現象は初めての体験だった。

「きもち、いい」

ロージはその現象を、プログラムによる制御から解放されるその瞬間を、「快感」と認識した。

男が呼吸を速く続けながら、陰茎を抜いた。白く濁った液体が糸を引く。

「気持ちよかったね。これがセックスだよ」

男の生殖器を体内に入れて磨り合わせること——セックス。

セックスによりもたらされるデータ。現象は、快感。自分はセックスすることに「気持ちいい」という感情を抱くようプログラムされたアンドロイド。

——本論にや。

ロージには、その疑問が自分のどこから、なぜ湧いてくるのかわからなかった。なぜなら、まだロージはアンドロイドを、「人」である、を理解できていないからだ。

セックスを、気持ちいい、と感じやすいかは、初期ステータスの割り振りの問題ではない。人間にとって都合のいい愛玩アンドロイドなら、ただ囁々だけの、音の鳴る大きな人形でもよいはずなのだ。

ロージがそう流られなかったのは、別の期待があったからだろう。

闇マスターに製造されたロージは、これから遭遇する人間たち——皆に言う立場との融れ合いの中で、自分の製造理由を理解していくことになる。



飲み込まずに
口の中に
広げるんだよ



口を開けて
舌を出して



フム

ローションで
潤せたかい？



口で薬仕する
フェラチオ
だよ



それじゃあ
練習しようか



フム

！



ほら
サンドが大きく
なってきた

ローラーが
気持ちよくして
くれたおかげだよ

お口のしびれ...

舌でくまなく
噛めるんだ



次は口の中に
入れて...
口をすぼめて
しこいて

...また
あの感覚を...



んんっ

か
い
ぱっ



昨日のも
これくらい大きく
噛み切れたらう？

...

上手にできたら
また挿入れて
あげるからね



快感が
出てる...
陰茎は快感で
こんな状態に
なるのか



我ながら
良い出来だ！

チンポで遊ぶ
綺麗な男……
とせられるぞ！



もし自分にも
陰茎があつたら！



最後は喉奥で
先頭を刺激して
やるんだ！



ズッ

そろそろ
射精させ
ろーっ！



綺麗な男……？
他のアンドロイドや
人間は果敢とないから
わからないけれど……



ロージャー！
イクぞおっ！

ん？！

なんで……？
人間のオシサーに
はたさる……？
あのオシサーは
濡れ込んで入る……

ズッ

愛玩 アイデンティティ

愛玩(あいがん)…

大切にしておもしろがること。
また、おもちゃにして楽しみとすること。





男性図がどうしたら
気持ちよくなるのか
マスターがなぜ
男性図タッチメント
なんて選んだのか

マスターが自分に
なにを望むのか



男性器アタチメントを着けた状態で、ロージューはフェラチオの練習をさせられていた。

ロージューはマスター以外の人間を知らないため、マスターが若いのか、老いているのかもわからないが、連日勃起をした陰茎をロージューに向けるほど精力のある男だ。製造されて10日も経たない内に、何度もロージューにその形を覚えてさせた。

そしてまたロージューも、その状況に適応しつつあった。

「んんーはぶっ、んっーんむー」

陰茎にローションを塗って挿れ付け、すばめた口でしてく、亀頭を上顎に押し付ける、マスターの陰茎に挿す刺激を、ロージューは股間によら下がるアタチメントに手で再現していた。

自分がマスターに与える感覚を再現させるように手を動かせば、機械でできた自分の内側に熱を感じる。それが単なるモーターによる熱なのか、人間の言う興奮なのかはわからない。

「ロージュー、自然してるのか？」

宛せられた単語の意味がわからず、しやぶったままマスターの目を見つめる。マスターはおもむろに口元に歯を隠した。

「そうか…手を置きなさい」

己を慰めていた手を取られ、両手を封じられたまま薬仕を続ける。

——触りたい。いま口の中で鼓動するものと同じように、自分も気持ちよくなりたい。

無意識に腰を振り合わせながら、電子頭脳から喋れた言葉を反響する。膨れ上がる感情に呼吸するように、ロージューの口淫は激しさを増した。

「はあっ、いいぞ、射撃する……」

「んろっ！……ん、はあ……」

マスターの精液が喉奥に突きつけられる。その刺激ですら今のロージューには要領のように感じた。

でも、足りない。あの時感じた快感が、まだメモリーに残り付いている。

「ふー…次のステップに進もうか、ロージュー」

マスターの締められた唇に、勃起しそうな感情のアンドロイドが映った。

日々マスターとの運行とボディメンテナンスをするだけのロージューの生活に小さな変化が起きた。

ソファアとローチェアブル、家具を置いた充電部屋があるだけの簡素な部屋に、テレビが設置されることになったのだ。マスターは「映像学習だよ」と言っていた。

ロージューはメンテナンスで考えられる限られたデータでしか世界を知らないため、テレビの存在に興味津々だったが、いざ映像が始まるとその画は驚かすことがなかった。

映し出されたのは、マスターと自分と同じように交わる人間たちだったのだ。部屋の中ではスリープモードになる以外にやることはないロージューは、仕方なく映像を見る。

初めて見るマスター以外の人間は、爪の形一つとってもマスターと違うのに、マスターと同じように腰を振っている。組み込まれている男はかつての自分と同じように淫を漏らし、身体を震わせる。

アンドロイドである自分は、セクサスする人間に似せて製造されたのだ——そう実感した。

それと同時に、また身体の内側が熱くなる。

「あぁー ナンボいい！ イタイター！」

映像の中で男たちの動きが早まった。シーラに顔を埋めていた男が背中を男なりに反らせて摩擦する様子を、カメラがアップで映す。その後、数秒の沈黙のあと隣面が尻から抜かれ、白濁が穴から溢れ出る。

ぐったりとして屏で息をする男に、ロージーは既視感を覚えていた。

股間のあたりがずんと重くなる。今は男性器アタタチメントも臀部のオナホーカも脱落していない。それでもロージーは確かに身体の熱——アンドロイドに無いはずの欲望を感じていた。

数日後、ロージーのメンテナンスを終えたマスターは言った。

「明日は私の代わりに人間が来るから、よく教えてもらいなさい。」

教えてもらうって、何を——そんなことは聞かなくてもわかっている。

なぜロージーにセックスを教えるのか、マスターは一度も言っていない。ロージーもまた、それを聞くことはなかった。なぜなら、自分が製造されてからずっとセックスしか知らず、自分以外のアンドロイドがこの部屋の外でどんな暮らしをしているのかも知らないからだ。

セックスで情手を覚悟もよくする、自分もセックスで覚悟もよくする——それがロージーの思う、自分という存在、だった。









しっかりチンポに
ご奉仕しなさい！



まだ私は
イロてないぞ

んあッ



あッ
チンポッ
またイロッ



…なんだ
充電切れか
だがコレ
なら…

金持ち共には
イイ玩具に
なるだろう…

もう何處指かれたかわからない。

初めてマスター以外の人間と交わったあの日から、機嫌となく、何日もロージーは知らない人間とセックスした。それはロージーが望んだことではなく、マスターの命令だった。

「ロージー、明日は私の友人が来るから失礼の無いようにね」

マスターの友人たちはロージーに食うなり呑なめずりをしながら顔を見つめてきたり、呼吸を充てて抱きついてきたりや横々だったが、最後は必ずロージーを抱した。

次第に彼らがマスターの友人でないことに気づいたが、それでもロージーは抵抗しなかった。マスターと部屋の間をしながらは逃れることができないと知っていたからだ。セックスによる快感も嫌いではなかった、というのも一つの理由である。

しかし、因縁を重ねることに、ロージーにとってセックスは快感を得るだけのものではなくなった。

「よく調教されたアンドロイドだね。顔も技術も人間よりよっぽどいいな」

「大金払ってるんだからその分返しませてくださいよね？ 期待してるよ」

「もっと腫れれ！ お前が気持ちよくなってどうすんだ！」

「博士はいい仕事をやるねえ。こんなスケベなアンドロイドは初めてだ」

ロージーとのセックスには対価——金銭が取引されていた。ロージーの知らないうちに、セックスは「仕事」になっていたのだ。取引をロージーが直視したわけではないが、自分を扱った男たちの口ぶりから推測できた。

そのことに気づいてからは、少しずつ自分の存在に対して、言葉で表現できない感情を持ち始めていた。

——自分はマスターにとって商品でしかなく、自分が喜んで受け入れていた快感は「仕事」のための機能でしかない。

その事実がロージーの中でわだかまりになっていったのだ。

一方で、もっと自分のことや自分を取り巻く現状を知りたい、このもやもやとした感情の形を知りたいという欲求が芽生えていた。

ある日、ロージーが充電機で横になっていると、部屋の外からマスターの声が届いてきた。

「……はオアションに……、では……で承り……」

通信で誰かと話しているであろうその声は、決して大きなものではない。

断片的にしか聞き取れないものだ。
今まで部屋の外から音が聞こえたことはなかったが、なぜか聞き取れるようになっていた。

日に日に聞こえる音の精度が高まっていることに気づいた。物音であれば、より広い範囲まで聞こえるほど、聴覚機能は向上していた。

そうして聞こえてきたマスターや、客の言葉は、自身にダウンロードされていない外の世界のことや客観的なロージーの存在を如実に表していた。

自分のセックスに金銭が発生すること、他のアンドロイドはセックスに特化したものでないということ、自分の綺麗な顔は男の欲を引き出すために製造であること。そして、自分——*オアションの愛*／ロージーは男の性欲を満たすために都合よく造られた非合達の愛用用アンドロイドであること。

ロージーの電子頭脳がそれらを学習するたび、*オアション*プログラムは「愛」を形作っていった。

今のロージーにとっての「愛」は、愛玩される存在であるという自己を確立することに他ならない。その思いはセックス、そして自己への機能に変化していった。

——どうしたらこの嫌悪から逃れられるのか……いや、言葉通り逃げればいいじゃないか。

「ここから、逃げたい……」

考えを口に出してみると、自分の言ってる言葉がびったりと嵌った気がした。

それからロージーは男と交わる生活をしていた。逃げようにも、ロージーのバッテリーは常に性交に必要な分しか充電できず、「仕事」の間しか稼働できないように制限されていたのだ。

人間とのセックスでは、相違わず身体が少しの刺激も快感に重なり、電子頭脳は快感のデータに押しつぶされてしまう。嫌悪の気持ちを感じている快感に逆らえない、プログラムに支配された身体が嫌かった。

「淫乱な悪い子にはお仕置きしないとねえ」

ロージーを盗で買った男は愉快そうにロージーの尻を叩く。痛覚のないアンドロイドの身体には、それは触覚センサーを通じて、ロージーのプログラムでは快感になり、喘音が漏れる。

「ちが……あう……んまあ……」

臀部のオナホールに埋められた触覚を動かされると、否定の言葉も言い切れず喘いでしまう。

——おい、淫乱なんかじゃない！

「尻叩かれながら犯されてるのに随しような声出して……ひびく。これじゃお仕置きにならないなあ」

男が笑みを浮かべながら言うと、ロージーの乳房を強く握り込んだ。マスターにアップデートされ、乳房も性感にされたしまったロージーにとって、この刺激は耐え難いものだ。

自然と出してしまう高い声に男が悦ぶ、その光景に嫌悪を感じる。

自分がどんなに否定しようとも、もうこの身体は深らで、はしたなくて、それゆえに意味の悦具にお誘え向きなのだ。

終わりの見えない日々の中、ロージーはマスターと自分を犯した人間たちへの思い——「怒り」が、Kobayashiに嫌悪のよう立ち込めるのを感じていた。

◆あとがき

テクユニの同人誌でははじめてまして、きゃしゃくと申します。
お手に取っていただき、ありがとうございます！

ロージューことロジたんは、本当に声も顔も性格も可愛くて好きなのですが、
公式ラジオでの「顔が可愛いのにちょっと秘密があるかも」という中の人の発言で
完全にハマってしまいました…

まだ公式からその秘密は公開されてないのですが、
いつかストーリーで明かされるんだと思うと課金が止まりません。
9月にはロジたん所属ユニットのイベント&新曲もあるし、これからも楽しみです！

思えばテクユニの初期の同人ガイドラインではエログロ禁止で、
「あんなにエロいキャラデザで宗教もリョナもあるメインストーリーなのに？」と
絶望していたのですが、5月くらいにエログロOKになり、
胸を張ってこの同人誌を出せるようになったのでした…今では懐かしい思い出です。
晴れて「顔が綺麗な違法アンドロイドって愛玩用じゃん！」という
気持ちの本にすることができてよかったです！

この本では、ユニット代表曲の歌詞を小説に反映したり、
漫画でもアンドロイドらしさにこだわったりしたので、楽しんでもらえると嬉しいです。
(本当は胸を張破るかっこいいポーラさん描きたかったのですが、力及ばず…
ロージュー救出のかっこいいポーラさんは公式で見られるといいな…！)
最後までお読みいただき、ありがとうございました！

ひとこと感想やチェックボックスを
ぽちぽちしていただけると嬉しいです！
形を込めた同人感想フォーム →



愛玩 アイデンティティ

2022/8/28 和を乱su